

茗溪



特集

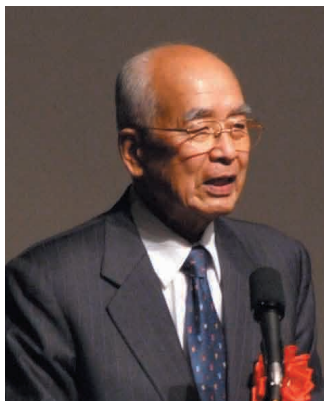
・菅平高原実験センター

- グラビア：01
法人制度見直しの行方をみる
茗溪会「法人制度検討委員会」の席上から：02
菅平高原実験センター
中部山岳の生物多様性と
地球温暖化の研究教育拠点：03～07
筑波大学関連施設紹介：08～10
通常総会開催のご案内：10
平成23年度 茗溪会公益事業計画（案）：11
第10回「顕彰」候補者の推薦依頼について：11
第15回茗溪・筑波
グランドフェスティバル開催：12～13
茗溪会／公開講座から：14～16
第26回教職受験対策研修会から：17
平成22年度
筑波大学芸術賞、茗溪会賞決定！：17
茗溪学園だより：18
桐の葉のつどい：19
日本寮歌祭閉幕す：19
季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい！：20
追悼録：21
著書紹介：21
本部だより：22
編集後記：22

meikei

春
2011
No.1069

この度、東日本を襲った巨大地震に関係されたすべての皆様に、心からお見舞い申し上げます。



挨拶する茗溪会西野理事長(左)と筑波大学山田学長(右)

「茗溪・筑波 グランドフェスティバル」

平成23年1月22日 筑波大学会館で

P.12 ~ 13 参照



(上) 地球科学の研究発表展示
(下) 「宇宙工学域」展示



旧友と歓談する新井実行委員長

筑波大学 菅平高原実験センター

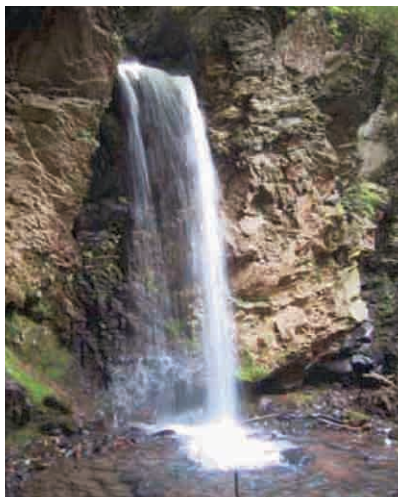
P.3 ~ 7 参照



センター実験研究棟・宿泊棟



菅平の草原 (6月)



菅平・大明神の滝

連続講座「初心者のための朗読入門」

平成22年10月12日~23年3月8日(全10回) 茗溪会館 P.14 ~ 15 参照



いっそうの絆を――

この度私たちは、東日本を襲った巨大地震とそれに伴う大津波、さらに加えて福島第一原子力発電所の爆発という、未曾有の大災害にのみ込まれました。関係された皆様に対しまして、心からお見舞い申し上げます、亡くなられた方々に深くお悔やみ申し上げます。

この大災害において、関係された皆様が、避難、救助復興などの活動に、互いに協力しあいながら立ち向かっている姿が報道されると、国内はもちろん、国際社会からも注目を集めました。

しかし一方では、買い占めや買いだめ等の行為が見られたり、メールなどを使ったデマや便乗詐欺が起こったりと、眉をひそめる行為も見受けられました。

このような現代日本人の姿を見るにつけ、私たちが社会を担うそれぞれの場面にあつて、その「人間関係」に断ちがたい「絆」を求めるものであるということを痛感しました。

私たちの先輩方は――

明治5年に近代日本の最初の官立による指導的人材養成の教育機関として、東京湯島の昌平黌跡に「師範学校」の設立を見たものが「茗溪」の創基に関わるものと私たちは理解しております。

その学び舎では、私たちの先輩方は、各分野において一流の教育を受け、一流の研究生活を送る中で、一方では生涯を決めるような「先輩や後輩」との出会いを得たと思うのです。日常生活面でも勿論のこと、災害時等にもお互いを思い合う、それが「同窓」という「縁」だったのではないのでしょうか。

そして、同窓生による全国的な組織として動き出した時、「同窓会」は有為な人材の宝庫として働きだしました。それが「茗溪会」の生まれるベースだったのです。

このような組織「絆」に守られる人々の間には「孤立・孤独」の社会はありません。

それに加えて、「社团法人」という公的な立場になった時、私たちの組織は、単に内むきの組織ということではなく、「社会的存在」としての働きと機能が付与され、その働きは社会からも要求されました。年間総予算の過半数を公益事業に費やすべきとの要求がそれです。

新しい「法人」の姿――

平成20年12月施行のいわゆる「公益法人制度見直し」の法律によって、私たちの組織も、以後、5年間の間で「一般社团」か「公益社团」かの何れかの法人体系に整理し、国の認可を得ることになります。

そもそも同窓会組織は公益法人には馴染まない、という国の方針もあり、茗溪会は「一般社团法人」の道を選択しました。

法人制度見直しの行方をみる

茗溪会「法人制度検討委員会」の席上から

「財団法人」が一定の資産の活用を拠り所に事業の展開を図るのに対して、「社团法人」は、多くの人々が「会費」という名目で定期的に資金を拠出して事業を展開します。この基本的な姿は変わりませんが、財団、社团の何れの場合も、「公益」法人は今まで通り年間予算の過半数を「公益事業」のために支出しなければならぬのに対して、一般法人は支出に対しての「縛り」はなくなるのです。

また、今までの「支部」もその名称は強制されず、会員によって自由なネーミングが付される自由なグループとして、中央との関係も、いわゆる拘束関係として公益事業等の開催を迫られたりすることはなく、地域、職域ともに会員同士の、任意で自由な友好的な場作りとして活性化させることが出来ます。むしろ「一般社团法人茗

溪会〇〇支部」というような、あたかも中央の下部機関と見られるような呼称は適当ではないとされます。会員個々の自由なグループが中央によって拘束規制されることを避けるためではないでしょうか。そして、それらグループの中にいる「茗溪会員」の人数によって、一般社团法人「茗溪会」の最終意思決定者としての「代議員」社員を送り出すこととなります。

なお、会の運営経費は、会員からの会費の拠出が中心的な柱であります。先輩会員の高齢化により会費完納者が増え、そのために先輩方には、賛助会費の納入という「法人制度見直し」以前のお願いがありまして、絶大なご協力を賜りたいところであります。

社会への「知の還元」を――

茗溪会が一般社团法人になっても、既に資産を所有するわが法人としては、これまでに形成された資産は公益目的のために使用しなければならぬとされています。

茗溪会はそれらを受けて、さらに、社会的な期待に応えるために、大学において開発し蓄積された「知」の、社会への還元を図る公益目的事業を行います。すなわち、教育研究の振興事業や、社会貢献等を含む優れた学術、芸術等諸活動への援助、表彰等、さらに公開講座の開催、母校への助成等がそれです。

現在進められている実務的な仕事としては、新しい法人への移行にむけて、理事会内に検討委員会を設けて、理事長、副理事長の指導のもと、各委員の白熱した議論を展開し、コンサルタントの応援を得て、定款改定作業、関連する資産の洗い出し等を進め、主務官庁である内閣府の担当部局の助言指導をいただいているところです。

そして、理事会や会員から寄せられる意見を加味し、大学当局からも熱心な指導を得ながら、いっそうの「絆」を求めて、肉厚な原案作りに汗を流しております。

茗溪会常務理事、事務局長 田中正造 記

菅平高原実験センター

筑波大学菅平高原実験センター長・教授 沼 田 治

近年、「生物多様性」の保全とその持続可能な利用が世界各国で注目されております。昨年の10月には名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)が開催され、生物多様性の危機は国民のよく知るところとなり、フィールド生物学の重要性は益々大きくなっております。しかし、地球温暖化が生態系に与える影響が最も危惧されている山岳域の研究教育施設は、本センターに加えて東北大学八甲田山植物実験所、信州大学志賀自然教育研究施設、九州大学彦山生物学実験所の計4か所を数えるのみです。その中で、常駐研究者が通年にわたって教育研究に従事しているのは、本センターただ1つです。



喜寿を迎えるセンター

今年10月12日に本センターはめでたく喜寿を迎えます。本センターは冷涼な高原地帯の生物や地理を研究する目的で、1934年10月12日に東京文理科大学附属菅平高原生物研究所として開設されました。

1949年に東京教育大学理学部附属菅平高原生物研究所と改称され、さらに1965年、東京教育大学理学部附属菅平高原生物実験所となり、植物育種学の研究、つづいて動物発生学の研究が行われるようになりました。1969年には現在の鉄筋コンクリートの教育研究棟(A棟968㎡・宿泊棟634㎡)が建設され、野外実習や研究のための施設としてさらに整備されました。また1955年より造成が続けられてきた樹木園も立派な樹林の姿をなしてきたので、1975年から一般公開を開始しました。

1973年10月に東京教育大学の筑波大学への移行にともない、1977年4月に本実験所も筑波大学に移管

開設当初は、中国北東部(旧満州)と似た気象条件を備えた菅平での農業生産の基礎的研究を目指し、当時農林省の技師であり東京文理科大学非常勤講師でもあった八木誠政博士により推進されました。東京文理科大学、東京高等師範学校の教官による動物学、植物学、地理学、地質学などの研究や学生の野外実習・野外実験などにも利用されていました。

され、筑波大学菅平高原実験センターと改称されました。これにともなう学生数の増加により、1979年新たに教育研究棟(B棟639㎡)が増設され、現在見られるような規模となりました。

菅平高原実験センターがある長野県上田市菅平高原は中部山岳の東側(北緯36度31分、東経138度21分)に位置し、その東側の浅間高原、北側の志賀草津高原とともに上信越高原国立公園に含まれる景勝の地です。

本センターは菅平高原のほぼ中央部にあり、根子岳(ねこだけ、標高2207m)と日本百名山の四阿山(あずまやさん、標高2354m)のなだらかな南西向き斜面の標高約1300mの所にあります。春はレンゲツツジの花とともに始まり、草原はワラビの芽吹きに覆われます。ダケカンバやシラカンバの新緑が濃くなるとさわやかな夏を迎えます。センターの中も実習学生たちの歓声でにぎやかになり、親子連れのカモシカがセンターを訪れます。短い夏が過ぎると山々は紅葉の季節を迎えます。カラマツが黄金色に輝き、カエデが赤く色づき、全山錦秋に染まります。林の中には色とりどりのキノコが顔を出し、ドングリが実り、動物たちは冬籠りの準備をします。そして、氷点下30度近くにもなる厳しい冬を迎えます。あたり一面、銀世界となりますが、雪上には獣たちの足跡を沢山見つけることができます。厳冬期にも生き物たちの生活が感じられます。このように豊かな自然の中に菅平高原実験センターはあります。

各実験地の特色

本センターの敷地面積は35haで、研究棟・宿泊棟などの施設区が2ha、樹木園が4.5ha、そして植栽等を行わない自然のフィールドです。

このフィールドには特筆すべき特色があります。それは本州中部地方の代表的な植生遷移系列を有することです。我が国の気候条件では、草原を放置しておくとも木々が進入し、長い年月の後にはブナなどの極相林へと遷移していきます。本センターの敷地の大部分は開設当初は放牧地でした。そのうち6haでは毎年秋に刈り取りを行



樹木園内 若いブナの林
～見学希望者はセンター事務室へご連絡を～

い、遷移の進行を妨げてススキ草原として維持しています。その東側に隣接して、順に約40年前に草刈りを放置したこと自然に森林化した4haのアカマツ林、約65年前に森林化が始まった5.5haのアカマツ・落葉広葉樹混交林、そして開設当初から放置した14haのミズナラ主体の落葉広葉樹林が広がっています。

センター開設後に造成がはじまった樹木園では、今日では200種あまりの樹木からなる立派な樹林となっています。菅平高原本来の自然林であるブナ林の復元を目指して、シラカンバ林の林床にブナの幼木を植えましたブナの生長にともなう生物相、微気候、土壌などの変化を記録し、野外実習や研究の場として利用できるように管理しています。樹木園は自由に見学できます。見学希望の方はセンター事務室にご連絡ください。

所在地・連絡先は、P7を参照ください。

草原にはススキ、ヤマハギ、ワレモコウ、カラマツソウ、ワラビなどが優占し、本州中部の典型的な山地草原が良好に保たれています。草原の土壌は四阿山の噴火によって噴出した火山灰の層に植物の腐食が加わってできた黒ボク土です。この草原の黒ボク土は人の手がほとんど入っておらず、土壌学の教科書にも取り上げられています。

る典型的な黒ボク土で、保全に力を入れています。

草原放棄後に成立した若齢林には、アカマツ、シラカンバ、マユミ、ズミ、ヤマハンノキ、ミズナラなどが生えており、極相林に遷移する途上の、先駆性樹木と極相性樹木が入り交じった生態系を観察することができます。落葉広葉樹林は大明神沢に沿って発達したミズナラ、シナノキ、トチノキなどからなる渓谷林です。この渓谷林は敷地内で最も自然度が高く、また菅平高原の中でも最も保存状態の良い渓谷林の一つです。大明神沢には冬季には完全氷結する大明神の滝が轟音をとどろかせており、周辺には多数の動植物が生活しています。生物科学、環境科学などの実習地あるいは研究地として極めて利用価値が高いので、その保護と保存に努めています。

教育活動

センターでは、現在、センター長、専属教員3名、研究員3名、事務係長1名、技術職員3名、宿舍担当、事務担当、研究補助の非常勤職員9名の計20名が日々の業務に励んでおります。特に技術職員は草原や森林の管理施設や設備の管理、生物採集、HP管理、そして冬の除雪作業など多くの業務を担当しております。

センターには気象学や生物学の観測施設も充実しています。気象観測機としては、温湿計、風向風雪計、雨量計、積雪計などが各種設置されています。二酸化炭素フラックス、熱フラックスなどの生態系観測用の大型観測機も稼働しています。

生物学の設備としては、微生物の観察に不可欠な各種光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡、透過型電子顕微鏡、実習に使用する双眼鏡、実体顕微鏡、生物顕微鏡、クリーベンチ、多数の恒温機・植物栽培機の他、生物多様性を遺伝子レベルで解析するためのDNAシークエンサーやサーマルサイクラー、試料破砕機、各種遠心分離機など、生物学の教育研究に必要な基本機器はほとんどそろっております。また、フィールド管理業務にはトラックター、小型積載車、RV車が活躍しています。自然史の研究においてしばしば決定的な役割を持つ

は、一次情報である標本です。当センターでは中部山岳地域の自然を主な対象として、さく葉標本（種子植物・シダ植物標本・コケ植物）約5000点、昆虫標本約3000点、鳥類標本約200点、ほ乳類標本や鉱物標本多数を保管しており、データベースを進めています。

本センターでは、生物科学、地球科学およびこれらに関連した分野の講義・野外実習・野外実験などが、毎年夏を中心に数多く行われています。実験室のすぐ目の前に自然豊かなフィールドが広がるという恵まれた環境で、学生たちは一日中集中して学習することができます。また、寒さが厳しい冬期にも、積雪に関する気象学の実習や、足跡の追跡など動物の行動に関する実習が行われています。そのほか、10数名の学生、大学院生が常駐し、生物学類を中心とした卒業研究の指導、関連大学院の修士および博士課程の研究指導が行われています。また、国内には本センターのような山岳地における野外実習施設が少ないこともあり、本学以外の大学等の実習にも頻繁に利用されています。

地域社会に開かれる

社会教育の一環として、広く一般に公開しているセンター内の樹木園には、毎年夏を中心に約2000名もの見学者があります。また、8月には全国の高校生を対象とした公開講座も開設しています。この講座では、高原の植物群落はどのような種類の植物から構成されているか、その群落をすみかとしてどのような動物が生活して

生物学類植物分類学野外実習中の実験室





足跡の追跡実習風景

いるか、それらの生活を支えている土の中にはどのような微生物がいるか、などを総合的に学習します。高校生達がここで学んだ生物学的基礎は、将来、地球環境問題を考えていく際に必ずや活かされてくるに違いありません。毎年24名の高校生がこの公開講座に参加します。そのうちの何人かが本学の生物学類に入学して、本センターで開講される実習に参加しているのを見るのは、本当にうれしことです。

昨年の5月から筑波大学社会貢献プロジェクトの一環としてナチュラリスト養成講座を開講しました。フィールド生物学に強い関心を持つ地元在住社会人を募り、自然観察に必要な知識や技術の習得と優れた自然観を培うことを目的として、毎月1回、センター内で講義と野外実習を実施しました。

今年の1月30日にナチュラリスト養成講座が最終回を迎えました。成果発表会と修了式を行い、めでたく22名の受講生が修了証を授与されました。この講座で自然観察の視点や技術を身に付けた意欲的な修了者が、将来、菅平高原実験センターで自然観察ガイドとして活躍することを期待しております。

菅平高原実験センターでは、今後もナチュラリスト養成講座修了生とともにオープンデー、自然観察会、生物多様性保全活動など様々な社会貢献活動を展開していきたいと考えております。

センターの研究活動

現在の菅平高原実験センターでは昆虫類の系統進化を明らかにしようとする比較発生学的研究、菌類、特にカビの系統分類に関する研究、草原の植生遷移の局所的な多様性の研究、そしてシロイヌナズナ属野生種を対象とした適応進化の研究が行われています。

昆虫類は動物界で約3/4の種類数を占める、地球上で最も繁栄している動物群の一つです。このような昆虫類がどのように地球上に現れ、進化し、現在に至ったのかという大問題を比較発生学の立場から取り組んでいます。本センターで故安藤裕筑波大学名誉教授と町田龍一郎教授の師弟が50年にわたって研究に従事して来られ、その研究業績は世界的なものとなっております。町田研究室では学生たちが、昆虫類の高次系統群を網羅するように材料を選択し、多くの発生形質に注目して、昆虫類の系統進化を明らかにしてきました。特筆すべき成果としては、最も原始的な昆虫類であるカマアシムシ目の胚発生を初めて明らかにし、昆虫類の起源に関する現在までの理解を大きく転換させました。また、数年前に南部アフリカから記載されたカカトアルキ目や、研究がまったくなされていなかった熱帯性のジュズヒゲムシ目の胚発生を初めて明らかにし、昆虫比較発生学分野での世界のリーダー、それを遂行できる唯一のセンターとして、精力的に昆虫比較発生学を進展させています。

カビやキノコなど菌類は既知種数約10万種、推定総種数150万種と言われる膨大な多様性を誇る生物群です。その系統分類や生態に関する研究は2010年3月に定年退職した徳増征二先生が30年以上続けてこられました。日本では、多くの大学の農学部や薬学部などで菌類の利用や駆除に関する応用研究が盛んに進められています。しかし、理学部において基礎科学的に菌類に取り組んでいる研究室はほとんどありません。本学では、東京文理科大学以来、理学的視点に立った菌類学の研究が進められてきましたが、その流れをくむ菅平高原実験センターでは、国内外の菌類学者を招いて研究集会やワークショップ

が多数開催され、基礎菌類学の拠点的な役割を担ってきました。徳増先生退官後は後継者として出川洋介助教が着任しました。出川助教は接合菌類をはじめとするカビの系統分類学、キノコや粘菌の種生生態学など、幅広く菌類の自然史に関する研究に従事しております。本センターでは研究の伝統を守り、後継者を養成し、さらなる発展を目指しております。

草原の植生遷移の研究は、2010年にセンターの草原の一部で「放棄」、「火入れ」、「耕起」の3つの処理を行い、各処理区でのその後の遷移過程を、長期間追跡していく実験を始めました。近年、スキー場閉鎖などによって放棄された草原を森林に戻すことが全国的な課題になっていますが、ただ放っておくだけでは数原になってしまう事例が多数生じています。この長期実験により、森林再生の有効策を見出すことが目的です。また、草原の多様性と生産性の関係も研究しています。生態学の分野で最も注目され検証されてきた仮説に、植物の種多様性が高いほど生産性が高くなると予測する多様性生産性仮説があります。しかしこの仮説は、自然植物群落ではほとんど支持されていません。この研究に従事する鈴木亮準研究員は、遷移初期では多様性と生産性に正の相関が生じるが、遷移が進むにつれて両者の相関は負に変化していくと予測しています。現在この予測を検証するために、菅平高原実験センターの草原内で遷移速度を変える4種類の実験処理区を設けて、処理区間での多様性・生産性関係を分析する実験を開始しています。

シロイヌナズナ属野生種のミヤマハタザオ (*Arabidopsis kamchatica* sp. *kamchatica*) は多年草で、似たような緯度の地域でも標高30mから3000mまで分布するのに対し、タチスズシロソウ (*A. kamchatica kawasakiana*) は一年草で、湖畔・海岸の低標高帯に局在しています。両亜種の生態の違いは遺伝的なのか、どんな遺伝子が関係しているのか、これらの問いに答えるために、田中健太助教、恩田義彦研究員、平尾章研究員は、生活史や標高適応に効く遺伝子の探索、対立遺伝子頻度の時空間変動、標高適応の強さや生活史の適応的意義などを生態学・遺伝学統合アプローチによって調べております。

現在、中部山岳地域の4つの独立な山塊の広い標高帯を網羅する計約30集団のミヤマハタザオを対象に、野外集団調査、DNA採集、種子採集、室内実験、野外移植実験を行ってきました。個体群生態学的調査によって、低標高では夏の暑さが、高標高では冬の寒さが個体群の存続を規定している要因であることが分かりました。室内実験によって、低標高の集団はいずれも高い耐熱性を有すること、低標高と高標高の集団ではカラシ油配糖体の濃度をはじめとした化学物質組成が異なること、高標高の集団ほど発芽が早いことなどが分かりました。また、ミヤマハタザオの低標高集団と高標高集団の間と、ミヤマハタザオとタチスズシロソウの間で、どのような遺伝子が特に異なるのかを調べる網羅的なスクリーニングも終了しています。本研究は、ダーウィン以来の問いである、「生物・非生物的要因による自然淘汰によって、異なる環境でどのような遺伝子を選択され、進化が起きてきたのか？」に直接答えることにつながるのではないかと、期待しております。

このように本センターでは昆虫の進化、菌類の分類、草原の植生遷移、適応進化と、生物学における重要な問題を形態レベルから分子レベルまで、そして環境豊かなフィールドを最大限に活用して研究しております。

3 大学連携事業「地球環境再生プログラム」

昨年の夏は日本列島を酷暑が襲い、各地で記録的な最高気温となりました。ロシアでも酷暑となり小麦の生産量が激減致しました。その結果、世界規模での食糧価格の高騰となっております。これら異常気象の原因は地球温暖化にあるといわれています。IPCC第4次評価報告書（平成19年11月発表）では、地球温暖化は明白であり、疑う余地がないとされ、水資源・水環境分野、生態系分野、農業資源分野をはじめとする多くの環境分野への影響が懸念されていきました。まさに現在、それが現実のものとなっております。

菅平高原実験センターが位置する中部山岳は、①世界的に稀な地質・地形の多様性、②生物進化の大実験場で

あり固有で豊かな生物多様性、③都市圏の水がめ、④気候変動に最も脆弱な生態系を擁する地域です。地球温暖化による気候変動が、中部山岳の生物多様性・生態系と人間に与える影響を解明・予測し、その緩和策を探ることを目的として、筑波大学・信州大学・岐阜大学の、気候、地学、水・炭素・物質循環、生物多様性の専門家が分野横断的に連携して、平成22年4月より、「地球環境再生プログラム」―中部山岳地域の環境変動の解明から環境資源再生をめざす大学間連携事業―をスタートさせました。

中部山岳には、ライチョウや高山植物など氷河期遺存種を含む多数の固有種が分布しております。これらの固有種は独自に進化して、豊かな生態系を形作っております。「地球環境再生プログラム」において菅平高原実験センターは地球温暖化の生物多様性と炭素循環に対する影響の解明を分担しております。

気候変動が生物多様性に与える影響に関しては、次の2つの研究テーマを進めています。

(1) 標高傾度に沿って生物群集（種間）と遺伝子（種内）がどう変化するか？

前述のシロイヌナズナ属野生種やシリアゲムシ、ガロアムシ、オサムシなどを研究材料として前述のような研究を展開しております。

(2) 山岳森林限界での温暖化実験

わずかな標高の違いによって生態系が激変する森林限界において、オープントップチャンバーによる温暖化実験を行い、温暖化が高山の生物多様性と物質循環に与える影響を調べています。場所は信州大学西駒演習林の標高2000mの森林限界です。そこに1㎡の通年温暖化区（温度増加、積雪期・雪圧減少）、夏期温暖化区（温度増加）、そして対象区を各5組ずつ設定し、①植生（木・草・シダ・蘚苔・地衣）、②土壌呼吸、③窒素無機化、④腐食、セルロース、分解菌の変化を追跡しています。

気候変動が炭素循環に及ぼす影響に関しては、本センター内で土壌呼吸と温暖化の影響を調べています。土壌呼吸とは、土壌表面からのCO₂の放出現象で、植物の根

呼吸と従属栄養生物（微生物）による土壌有機物の分解呼吸を含みます。最近20年間の温暖化に伴い土壌呼吸は増加していますが、その動態についての理解は進んでいませんので、その実態解明をめざしております。

この研究事業は各大学から74名の研究者が参加し、学生を含めると100名以上が参加する大きなプロジェクトです。多くの若手研究者のためのポストも準備することができ、若手が中心になって活発に研究活動を進めています。そして菅平高原実験センターの研究者達も、「地球環境再生プログラム」の中核を担い、重要な研究成果を挙げるべく、日々努力しております。



西駒ステーションのオープントップチャンバー

将来に向けて

また、海外の研究者との交流も盛んにして、国際的な山岳研究拠点にしたいと思います。

菅平高原実験センタースタッフ一同は、山岳フィールドにおける生物多様性と地球温暖化の研究を推進する研究・教育拠点としての本センタールの発展を実現するため、日夜努力しております。そして地域貢献の充実によって、周辺の住民から愛されるセンタールを目指して日々活動しております。われわれの努力は徐々に軌道に乗って来ておりますが、今後とも皆様のご支援をお願い致します。

長野市

須坂市

根子岳 2207m

大松山 1649m

四阿山 2354m

菅平高原実験センター

菅平高原

長野県

群馬県

田代湖

嬭恋村

坂城町

上田市

湯ノ丸山 2101m

烏帽子岳 2066m

筆ノ登山 2228m

浅間山 2568m

東太郎山 1301m

東御市

小諸市

御代田町

軽井沢町

[illegible]

■所在地 〒386-2204
長野県上田市菅平高原1278-294

■連絡先 TEL 0268-74-2016

■公共交通手段の場合

JR 長野新幹線・しなの鉄道「上田駅」で下車。駅前バスターミナルから「菅平高原」または「西菅平」行きバスに乗車。

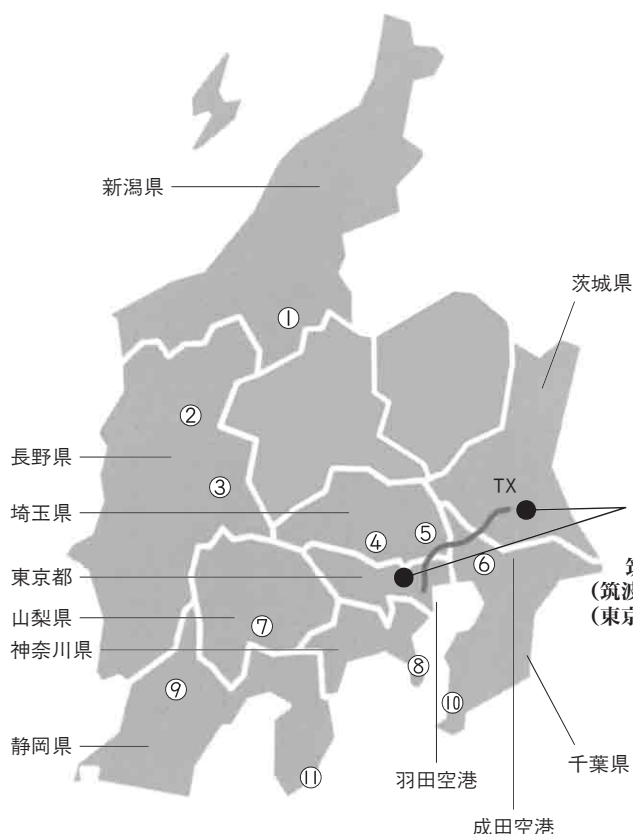
「菅平高原ダボス」または「スポーツランドサニアパーク」で下車。上田駅から菅平までのバスの所要時間は約60分。

■自動車などの場合

上信越自動車道「上田菅平インターチェンジ」から国道144号線を菅平方面へ。国道144号線「菅平口」交差点から国道406号線に入り菅平方面へ。上田菅平インターチェンジから菅平までの車で道の所要時間は約35分。



筑波大学 関連施設紹介



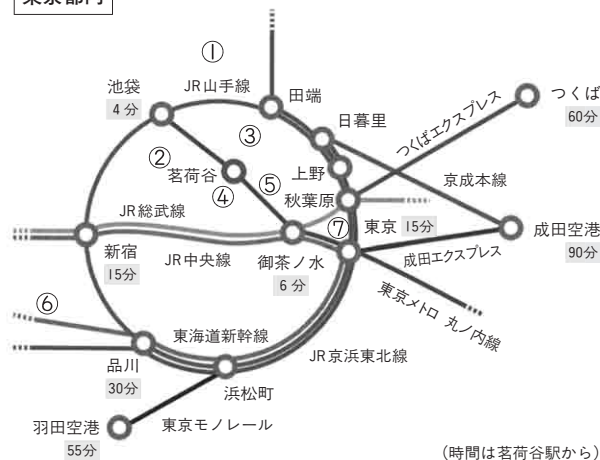
- ① 石打研修所
- ② 菅平高原
実験センター
- ③ ハヶ岳演習林
- ④ 附属坂戸高等学校
- ⑤ 戸田艇庫・宿所
- ⑥ 附属聴覚
特別支援学校
- ⑦ 山中共同研修所
- ⑧ 附属久里浜
特別支援学校
- ⑨ 井川演習林
- ⑩ 館山研修所
- ⑪ 下田臨海
実験センター

筑波大学には、筑波キャンパスのほか、東京都内に大学院夜間課程や附属学校を統括する附属学校教育局がある東京キャンパス大塚地区、法科大学院が入っている秋葉原ダイビルの東京キャンパス秋葉原地区などがあります。

これらのキャンパス以外にも、下田臨海実験センター・菅平高原実験センター、ハヶ岳と井川の演習林施設等の教育・研修施設、山中共同研修所、館山研修所、石打研修所、戸田艇庫・合宿所等の研修施設があり、次にご紹介致します。

なお、下田臨海実験センターについては本誌1059号で、各附属学校については1065号で、菅平高原実験センターについては本号で紹介致しました。

東京都内



- ① 附属桐が丘特別支援学校
- ② 附属視覚特別支援学校
- ③ 東京キャンパス(大塚地区)
- ④ 附属中学校
附属高等学校
- ⑤ 附属大塚特別支援学校
- ⑥ 附属駒場中学校
附属駒場高等学校
- ⑦ 東京キャンパス(秋葉原地区)

山中共同研修所

(山梨県南都留郡山中湖村平野479 電話: 05555-16210309)

東京教育大学時代は「岳東寮」として、宿泊しての春の新入生歓迎会、夏の各クラブの合宿、春から秋にかけての周辺の山に登るための宿、冬には当時は結氷した山中湖でのスケートやワカサギ釣りの宿として、利用されたOB・OGも多いことでしょう。

現在は筑波大学はじめ、関東甲信越地区に所在する国立大学の学生及び国立大学法人の職員が、豊かな自然のなかで寝起きを共にしながら研修をおこなうための共同合宿施設として、学内外から数多く利用されています。

山中湖は標高982mの高所にあるので、真夏でも涼しい施設で、研修棟と宿泊棟があり、収容人員は76人。90人と45人収容のセミナー室があります。交通機関は、新宿から平野行き的高速バス(2時間20分ほど)か、中央線で大月まで行き、富士急行線で富士吉田駅下車、平野行きのバスで25分の「撫岳荘」下車徒歩7分です。



山中共同研修所

館山研修所

(千葉県館山市北条2861 電話：0470-2211942)

房総半島の先端に位置し、黒潮に洗われるため四季をつうじて温暖で、春は菜の花摘み・イチゴ狩り、夏は海水浴、四季をつうじてヨット・ボート・サーフィン・釣りなどで賑わう自然環境の中で、学生・教職員が寝起きを共にしながら研修を行う施設です。

施設は研修棟と宿泊棟があり、収容人員は53人。75人と20人収容の研修室があります。

交通機関は東京から内房線の特急で約2時間で館山駅または高速バスで約2時間。駅から徒歩3分と便利な場所にあります。



館山研修所

石打研修所

(新潟県南魚沼市舞子181912 電話：025-7831286)

なだらかな丘陵地帯に位置し、閑静な自然環境の中で学生・教職員が寝起きを共にしながら研修する施設です。研修所付近には、初心者から上級者までが楽しめるスキー場があり、研修棟には研修室とトレーニングルームが揃っており、種々の合宿研修に利用されています。

収容人数は80人。研修室は72人、45人、27人収容の3つの研修室があります。交通機関は東京から上越新幹線で約1時間15分の越後湯沢駅から舞子経由六日町行きのバスで万条新田下車徒歩10分です。

***申し込み方法** (3つの施設に共通)

筑波大学のステューデントプラザ3Fの学生部学生生活課学生支援へ。利用開始日の2ヶ月前から10日前まで。現地での申し込みと日程変更不可。申し込めるのは、関東甲信越地区に所在する国立大学の学生及び国立大学法人の職員。



石打研修所

戸田艇庫・合宿所

(埼玉県戸田市戸田公園5147 電話：048144311713)

戦後長い間「東京教育大学艇庫建設予定地」と書かれた柱しかなく更地のままであったこの地に、現在の「筑波大学戸田艇庫」が完成したのは昭和四三年三月のことです。JR埼京線戸田公園駅から徒歩約十五分の戸田公園内戸田ボートコースに面して建てられています。現在筑波大学体育会漕艇部や筑波大学附属高校漕艇部の重要な活動拠点になっています。また、この戸田ボートコースの両サイドには、本学を含め国公私立諸大学その他実業団チームの艇庫が並びその様は壮観です。

この戸田ボートコースは、幻となった第十二回東京オリンピックのボート競技場として計画され、昭和十五年に完成し、戦後実現した東京オリンピックのボート競技会場となりました。現在の筑波大学艇庫用地は、この工事に学生の勤労

奉仕等で協力した当時の東京文理科大学と附属中学校に分譲譲渡され、その結果今日に至っています。ボートコースは日本唯一の人工的に造られた静水直線コースで、全長二二五〇メートル幅九十メートルあります。毎年国内の主要なボート競技大会が開催され、ボートの「メッカ」となっています。



戸田艇庫・合宿所

演習林

○八ヶ岳演習林

(長野県南佐久郡南牧村野辺山 電話：0267-19812412)

① 治 革…(昭和31年)

東京教育大農学部附属八ヶ岳演習林として、本学における最初の演習林(79ha)が実現しました。

(昭和50年)

東京教育大学の閉学に伴い筑波大学に所属替えされました。

② 概

要…高原列車で有名なJR小海線の野辺山駅から南方2kmに事務所があります。演習林は八ヶ岳の主峰赤岳の東山麓の標高1350m～1450mにあります。年平均気温6.5℃年、降水量1450mmで八ヶ岳の国有林に属し、現在の林況はミズナラ、カンバ類を主とする天然広葉樹林が大半を占めています。

③ 宿泊施設…八ヶ岳演習林 学生宿舎 48人

○川上演習林

(長野県南佐久郡川上村大字御所平字矢出原 電話：0267-19812412 八ヶ岳演習林と同じ)

① 治 革…(昭和34年)

野辺山の隣接地である川上村村有林の事務所地上権を設定して、川上演習林としました。

(昭和44年)

隣接の村有林の地上権を設定し川上演習林に併合し面積を188haとしました。

(昭和50年)

東京教育大学の閉学に伴い筑波大学に所属替えされました。

② 概

要…表層は褐色森林土及び黒色森林土からなり土壌条件は良好です。カラマツを主とした人工林で、八ヶ岳演習林に比べて気象条件はやや温和です。

*実

習…八ヶ岳・川上演習林を利用した学生実習(これまでの実績22005年)

緑資源総合実習(20)

植物寄生菌学実験(30)

土壌調査法実習(36)

緑資源育成学実習(30)

八ヶ岳とその周辺の地形地質(12)

生物野外調査法実習(100)

川上演習林の見学と自然観察(100)

(-)参加人数

○井川演習林

(静岡県静岡市葵区井川162112 電話：054126012419)

① 治 革…(昭和37年)

静岡県安部郡井川村村有林に地上権を設定し、東京教育大学農学部井川演習林(1761ha)としました。

(昭和50年)

東京教育大学の閉学に伴い筑波大学に所属替えされました。

② 概

要…静岡駅からバスで2時間半で井川事務所に着きます。またJR東海道線の金谷駅から大井川鉄道にて千頭経由井川駅に着き15分で着きます。演習林は事務所から大井川上流へ車で50分のところにあります。赤石山脈の東にある白根山系の中央

にあり、下限は950m、上限は青蘆山(2406m)です。演習林は伐採地にスギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツなどの拡大造林を実施しました。

井川演習林管理棟 28人

井川演習林無岳作業所 15人

井川演習林管理棟 28人

井川演習林無岳作業所 15人

井川演習林管理棟 28人

井川演習林無岳作業所 15人

通常総会開催のご案内

社団法人 茗 溪 会

社団法人茗溪会では、平成23年度通常総会を、左記の通り開催しますのでお知らせいたします。

記

日時

平成23年5月26日(木)

午後2時から4時まで(予定)

場所

茗溪会館二階「茗溪」の間

議題

①平成22年度事業報告の件

②平成22年度決算報告の件

③平成23年度事業計画(案)の件

④平成23年度予算(案)の件

⑤公益法人制度移行の件

⑥理事・監事改選の件

⑦その他

また、総会終了後、出席者懇談会を予定しております。

・茗溪会各支部の支部長、代議員の方々には、あらためて別便でご案内いたしますが、出席を予定しておいてください。

・なお、都合で出席できない場合は、代理者の派遣をお願いいたします。

平成23年度 茗溪会公益事業計画（案）

1. 公開講座等の開催（前年度から継続）

- (1) 教養講座 対象 一般社会人、学生、生徒等

東京地区－会場・茗溪会館。つくば地区－会場・大学会館、研修センター。～ともに、個別のテーマを設定し、筑波大学教員、茗溪会理事ほかを講師に委嘱する。開催はそれぞれ年間2回程度。

また、つくば地区開催の場合は、筑波大学、地元県、市当局、教委等の後援、筑波学都資金財団、紫峰会等の協賛を得る。

- (2) キャリア情報等の講座 対象 大学卒業予定者のうち就職希望者、卒業後転職希望者等。

開催期間、内容等 ①9月～3月の期間に8回程度実施 講師の委嘱、筑波大学、資金財団と共催

②3月中の3日間 研修講座の企画、実施 筑波大学、資金財団と共催

- (3) 現職教育研修講座 対象 主に中高教職員等。

テーマ 教育現場で当面する課題等の自由討議。 東京各支部と共催。

2. 顕彰（前年度から継続）＝下記の依頼事項を参照されたい。

社会貢献功労者の顕彰。一般社会人（個人または団体）を候補対象。特に青少年を積極的に顕彰候補とする。

3. 追悼のつどい（前年度から継続）

日時〈予定〉9月10日（土） 会場 東京・茗溪会館

4. 季刊誌「茗溪」の発行（前年度から継続） 発行の時期（号）春、夏、秋、正月

主な掲載内容・巻頭特集〈予定〉正月号・理事長とゲストの話。春、秋号・ゲストの話。夏号・総会報告。

ほかのページ・読者の投稿、公開講座のレポート、執筆依頼原稿、会見情報等。

5. 後援、協賛、協力等（前年度から継続） 対象 支部、関連団体等が開催する公開講座等の公益事業

以上の公益事業計画（案）は、理事会の承認、通常総会の議決を経て確定、実施される。

第10回「顕彰」候補者の推薦依頼について

茗溪会が主催する顕彰事業は、茗溪創基130周年を記念して始められた公益事業です。平成23年には第10回を迎えます。

顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している青少年や一般社会人です。今回も、候補者を積極的に発掘し、下記の要領により、推薦していただきたい。ただし、公益事業としての事業の趣旨から、政治家、現職の公務員等を避けるほか、現在、本会の本部、支部の役員等の役職にある者は対象外とされたい。なお、本会会員であっても、その社会貢献の実績が社会的に評価されている場合は候補の対象から除かない。

また、社会的客観性を高めるためにも、当該地の教育委員会、新聞社（支局等を含む）、放送局あるいは関係団体、有識者、本会会員各位からの提案、参考意見等を積極的に求められたい。

記

- (1) 顕彰対象 社会貢献功労者 一般社会人（個人または団体）を対象とする。

特に青少年の活動に注目して積極的に推薦されたい。

- (2) 推薦 支部および本部理事から候補者を推薦する。推薦にあたっては、世代、地域、職業等にこだわらず、全国的な広い視野から、候補者を推薦されたい。

- (3) 選考 推薦された候補者の中から選考委員会において顕彰対象者を選考する。選考委員会は副理事長を委員長とし、内（各部長）外（理事長が委嘱した有識者）の委員により構成する。

- (4) 推薦締切 候補者の推薦締切は平成23年9月末日とし、関係書類を本部事務局へ提出されたい。

- (5) 顕彰式等 顕彰者を本部に招いて、顕彰式、祝賀会を実施し、顕彰録を刷成して関係者に贈呈する。

また、顕彰者の社会貢献活動の概要や横顔等を、季刊誌『茗溪』に掲載し、周知する。

フェスティバルへの「想」い

茗溪・筑波グランドフェスティバルは今回で第15回を数え、2011年1月22日(土)に筑波大学学生会館で開催されました。前回大会から、関係各位のご助力により、名実ともに茗溪会と筑波大学との共催として開催できることになり、共催としての開催も2回目になりました。筑波大学の在学生、卒業生、修了生、教職員のみならず、東京教育大学をはじめとする前身校の卒業生、修了生の皆さんにとっても、交流を深める良い機会になるよう実行委員会、学生委員会で活発に議論を進め、企画運営にあたり、当日の学生スタッフにも多大な協力を受けました。

1月22日は昨年と同じように、比較的晴天に恵まれました。当日の参加者約215名、参加費を払っていただき当日都合で来られなかった方も含めると約250名の方々から参加へのご協力をいただきました。

本フェスティバルは、筑波大学と前身の東京教育大学など諸学校・大学の卒業生・修了生などが、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を拡げることを目指して毎年1月を中心に開催されるようになったものです。第7回大会までは、大塚キャンパス、茗溪会館を中心として東京地区で開催され、第8回大会からは筑波大学と東京地区の隔年開催になっていました。その後、総合交流会館のオープンやつくばエキスポエスの開通などがあり、筑波大学での連続開催に関して関係者のご協力が得られたため、第12回大会からは筑波大学開催として、本年の第15回大会も引き続き筑波大学で開催致しました。

本年度のテーマ字は「想」で、このグランドフェスティバルを核にして、共に楽しみ協力するための同窓会組織として発展させていけることを考えて、茗溪と筑波大学および関連する方々の想いを、このテーマ字に込めました。さらに、「想」いの他に想像の「想」でもあることから、宇宙と地球に関するシンポジウムをアート、ビジネス、基礎科学の異なる面から基調講演も含めてディスカッションしていただく企画と展示企画に致しました。

実行委員長 新井達郎
(筑波大学数理物質科学研究科教授)

その後、第2部として、パネルディスカッションを行いました。パネリストを兼ねた司会を内富素子氏(宇宙航空研究開発機構JAXA国際部主任)、パネリストとして、逢坂卓郎氏、上松佐知子氏(生命環境科学研究科准教授)に参加していただき、1時間30分議論をしていただきました。

に、講演時間が終わってしまったという印象を受けました。

その後、第2部として、パネルディスカッションを行いました。パネリストを兼ねた司会を内富素子氏(宇宙航空研究開発機構JAXA国際部主任)、パネリストとして、逢坂卓郎氏、上松佐知子氏(生命環境科学研究科准教授)に参加していただき、1時間30分議論をしていただきました。

想

テーマ字は「想」



筑波大学のメッセージソング
「IMAGINE THE FUTURE」の合唱

オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、最初に、大会会長である山田信博筑波大学長の大会開催のご挨拶があり、その後、茗溪会理事長の西野虎之介氏から同窓会を代表してご挨拶をいただき、最後に、実行委員長の新井達郎より

当日は12時から展示企画を行い、13時30分から講堂でオープニングセレモニー、14時からシンポジウムを開催しました。展示企画は、「宇宙、地球科学に関する展示」を行いました。オープニングセレモニーの終了後筑波大学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE」の合唱がありました(写真上)。なお、この、メッセージソングは昨年の第14回茗溪・筑波グランドフェスティバルで基調講演して下さった同窓生コピーライター一倉宏氏が作詞されたものです。

シンポジウム「宇宙利用の未来」

シンポジウムでは、「宇宙利用の未来、新たな地球観形成へ向けて」と題して、基調講演とパネルディスカッションを企画しました。

基調講演は逢坂卓郎氏(筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)にお願いしました。逢坂卓郎氏は、JAXAとの共同研究や日本の宇宙飛行士との交流を通して、宇宙をクリエイティブな次元と考えるおられ、宇宙における芸術を追求しておられます。「人類の劇的な進化を目の前にしている私たちがなすべき事、地球外からの視点による新しい世界観の獲得」に関する講演を45分間行っていました。非日常的な視点から日常を見る宇宙飛行士の体験を芸術的な行為と重ね合わせて芸術作品に仕上げるなど、芸術に対する新しい視点を感ぜさせて

第15回

茗溪・筑波
グランドフェスティバル



シンポジウムの講師 左から

逢坂 卓郎氏（筑波大学人間総合科学研究科教授）
内富 素子氏（宇宙航空研究開発機構国際部主任）
上松佐知子氏（筑波大学生命環境科学研究科准教授）

人のパネリストの方々には、ご自身のこれまでの研究経歴、制作経歴から、周囲の人達との関わりも含めて、お話ししていただき、あつという間に時間が過ぎてしまった印象でした。

講演後、会場からもいくつかの質問やご意見をいただき、会場と一体になった有意義な時間で、聴衆は大いに満足されていたようでした。

宇宙工学域と大気科学の展示

恒例の展示に関しては、大学院の専攻の枠組みを超えた横断的な研究組織として宇宙工学に関連した学際的な研究を行っている「宇宙工学域」、地球科学分野の大気大循環というグローバルな大気科学（気候学、気象学）を研究している（田中博）研究室などの協力で、12時から大学会館ホール前ホワイエで出展がありました。参加者の関心を集めた展示でした。

世代を超えて懇親会

懇親会は第一エリア食堂において17時から開催され、大会副会長の西川潔副学長のご挨拶、参与の江田昌佑若溪会副理事長のご挨拶につき、7名の関係者による鏡開き、赤平昌文副学長の乾杯などのあと、世代を超えた交流を楽しみました。余興として、筑波大学のサークルパフォーマンスが披露され、筑波大学斬桐舞、筑波大学応援部WINSのパフォーマンスが披露されました。最後に、恒例の宣揚歌を実行委員藤堂良明氏と応援部WINSの指揮のもと全員で輪になり肩をくみ斉唱し、筑波大学と同窓会若溪会の発展と来年の再開を約束して散会となりました。昨年からの特徴として、今年も筑波大学学長をはじめとする先生方、若溪会理事長をはじめとする、理事や卒業生の方々など、シンポジウムのはじめから、懇親会終了まで多くの方々が帰らずに交流を深められている様子が見受けられ、その意味でも、極めて有意義な会であったと思われまふ。世代を超えて交流されていた様子も見受けられました。

同窓生交流の輪

本フェスティバルは、1年で一番寒い時期に開催されますが、第15回大会も出席者の方々から好評をいただき、今後とも発展させて行くように激励をうけました。これもひとえに関係され、陰に陽にご援助ご協力いただきました関係各位のおかげです。



写真上 筑波大学応援部WINSのパフォーマンス
写真下 「宇宙工学域」の研究発表の展示

とりわけ、山田信博学長並びに筑波大学本部の皆様方、西野虎之介理事長をはじめとする若溪会本部の皆様方、大学会館の職員の皆様、教職員各位、紫峰会の職員の皆様方からは、物心両面のご援助とご協力をいただきました。て、厚く御礼申し上げます。

同窓会・若溪会の方々が、現役の学生にたくさん話かけていただき、その後も、メールのやり取りなどで、年代を越えて交流を深めつつあることを後日談として伺い

ました。グラントフェスティバルを筑波大学と同窓生の交流の場としてさらに発展させていくことが出来ますよう、皆様方の一層のご支援をお願い致します。私も、30年以上前に同窓生であった先輩がこのフェスティバルの案内を見て、参加して見ようとおいでいただいたことをご本人から伺い、このような会の継続の意義を改めて認識いたしました。

筑波大学と若溪会の共催として本フェスティバルが、益々発展し、同窓生の交流に役立つことを期待しております。

新井達郎 記

茗溪会の公開講座から

本部主催と支部主催と

連続講座

初心者のための朗読入門

講師 小川 道子

(朗読／ナレーション)

10月12日～3月8日(全10回) 茗溪会館にて

半年間にわたる連続講座「初心者のための朗読入門」

は、10月12日第1回から月2回のペースで続き、3月8日に10回の講座を終了した。半年間にわたる長丁場であったが、修了式を迎えることが出来た。

事務局では小川先生の講義内容を記録し冊子にまとめ、修了式で受講者への記念品とした。その『聴講ノート』の中からある一日を取り出して講座の雰囲気を感じていただく。また、受講者お二人の感想文を紹介する。

ある日の「聴講ノート」から

1月25日 前回に引きつづいてエッセイの朗読。はじめに先生から、作者の幸田文の文章について出久根達郎氏の文章が紹介された。出久根氏は茨城の方言コンプレックスを抱いていたのだが、幸田文の文章に出会って「方言コンプレックスを解かれただけでなく、文章の自由を教えられた」と書いている。また、何を軸に作品を見ていったらよいか、ということについて先生は、前回読み上げた滝沢修『俳優の創造』を引きながら、「素直な感じ方」について、次のようなお話をされた。

*

精神を集中して二度三度読むうちにいつしか無理なく頭にのこる、無理なく素直な心にしみる感情、自分はどこに心を動かされたかをだいにしにする。

素直に感動するとともに、その一方でそれでいいのかという自己反省の心をもちたい。しかし、批判的であらねばならないと思ったり、欠点を見いだそうとしたり、人の思惑を気にしたりすると、素直にものを見る心の働

きが干からびてしまう。まずは自分がどう感じるか、そのことを軸にして、作品そのものと向き合うことだ。

文章を読むことに深く自分というものを関わらせていかないと、ただ上手に読めただけになってしまふ。朗読では、作品から感じることをそのまま素直に表す。作者の言おうとするところをよく味わって、自分のものにして朗読することがだいじだ。

*

次いで前回欠席の受講生から、自分の選択した作品の感想を聞いた。

幸田文「汽車」については「私も4〜5歳の頃横浜駅の陸橋で父にせがんでこだま号を見に行ったが、中年になって改めての勉強なので実感を持つ」、「砂利」を選んだのは、「多摩川の描写が国木田独歩の武蔵野を思い出す、人が石をあたためるというのがいい」、夏目漱石「二十九」は「漱石は読みやすい」などの感想があった。

朗読の実習に移った。はじめに、漱石の『ガラス戸の中』から猫について書かれた「二十八」を選んだ5人が順に朗読していった。朗読の途中で先生からは、矢継ぎ早に、チェックとコメントが入る。例えば次の文章である。

「去年私の病気を少し前に、彼は突然皮膚病に罹った。顔から額へ掛けて、毛が段々抜けて来る。それを頻りに爪で搔くものだから、瘡蓋がぼろぼろ落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭な顔をした。」(傍線は「彼」は漱石の飼っている猫のことである。「私の病気をする」の「の」は格助詞で「私が病気をする」と同じ

意味。私がこうなる前に彼は：という具合に、「私(漱石)」と「彼(猫)」が対比されていることを意識してお

く。また、何度も指摘されたのは、「その」「この」という指示語があるとき、それが前文の何を指しているかを意識しながら、かかる語にくっつけて読むようにしよう、例えば、「この本」というとき「この、ホン」と離れない。「この見苦しい様子」というところで、「この」は前文にある猫の「瘡蓋がぼろぼろ落ちて、痕が赤裸になる」という様子をうけていることを意識すること。「この」は「見苦しい」を超えて「様子」にかかる、「言葉」をどんどん割って見ていく」ようにしよう、と指導された。



「猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどつと寐でしまった。」という箇所でも、「猫が」でテンをうち「自分の方が」でテンを付け、文章を分けて、猫と自分を対比するように、言葉を押さえ押さえ読んでいこう。修飾する言葉を最初は捨てて読む、それから修飾する言葉を見ていくと意味が生き生きと見えてくる。また言葉と言葉の対応関係、猫と自分の因縁にこだわる漱石を面白く感じ取りながら読むといい」というコメントがあった。次の作品は漱石の生いたちを題材にした「二十九」。

「それだのに浅草から牛込へ移された当時の私は、何故か非常に嬉しかった。そうしてその嬉しさが誰の目にも付く位に著しく外へ現れた。(中略6行)下女は暗い中で私に耳語りするやうにこういうのである。——『貴君が御爺さん御婆さんだと思っていらいっしゃる方は、本当はあなたの御父さんと御母さんなので

すよ。先刻ね、大方その所為であんなに此方の宅が好なんだろう、妙なものだ、と云って二人で話していらしたのを私が聞いたから、…」

作者が祖父母をほんとうの父母だと知らされる瞬間である。「その」「あんな」は、はるか数行前の文章を指している。それを受けてのこの言葉であることを踏まえて読むことが大事だ、と先生は言われた。

そのほか次のようなお話で今回の講座を締めくくった。「この漱石の文章を、どこか気丈な、猫ごときものと自

受講生の感想文から

作品に素直に向き合う

両角三佐子

自分も楽しみながら人の役にたつことができれば…と考えて、興味をもったのが朗読です。茗溪会のチラシの『人と人を結ぶ朗読の楽しみ』というコピーに惹かれて受講させて頂きました。

初心者も経験者も含めた受講者に向けて、小川先生の講義は、「朗読」という行為のもつ本質的な意味を、様々な側面から伝えてくださいました。文章の正確な伝え手としての朗読、自己表現としての朗読、楽しみとしての朗読、そしてコミュニケーション手段として「人と人を結ぶ朗読」。10回の講義で朗読者としてすぐに役にたてるわけではありませんが、朗読を学ぶことの「意味」を最初に教えていただいたことは、これからの勉強の土台となる貴重な体験になったと思います。

印象に残っているのは先生が読んでくださった、滝沢修の「素直な感じ方」という文章です。著者が俳優として初めて台本に向き合うときの心構えを綴ったものですが、慎みと尊敬の心をもって、自分を偽らず、素直に心にしみる感銘をそのまま大切に持ち続ける、というものでした。私自身、まずは力を抜いて、文章に素直に向き合う姿勢を大切にしたいと思います。

毎回、一緒に講座を受講された皆さん一人一人の魅力に触れることができるのも楽しみの一つでした。今後ス

分を対比させていく漱石の面白さ、何ともいえないおかしみ、次々と描き出されるおかしい情景、その一つひとつを自分で思い浮かべながら読んでいくとよい。」

「しかし一方で、哀しい話だからといって、読み手が感じたそのムードにおぼれるのではなく、あくまでも文章が語ってくれるというのを忘れずに。朗読の原則は、作者や作中の人物になりきるのではなく、伝えたいのはこんなことですよという間接的なものだ。」

キルを磨いて地域で活動しようとするとき、皆さんが同じように各々の立場で頑張っていこうとすることを考えると勇気がでます。皆さんの顔を思い浮かべながら自分のできる活動を探していきたいと思います。

表現する喜びを感じながら

人見富美子

昨年10月から始まった朗読講座が今年3月、最後の第10回を終えた。寒い時期、しかも夜。通い続けられるか心配でしたが、講師の小川さんのご指導のもと、修了することができました。

「朗読とは、文字をただ声に出して読むことではなく、作品の内容を理解し、自分を通して聞き手に伝える表現行為です。作品をよく眺めて、時間の流れや書いてないところを掘り起こして、情景が浮かぶようにイメージすることが大切です。」と小川さんは話されました。

眼だけで文字面を追う読書と違って、声に出すには読みの難しい漢字やアクセントなどを調べることも大切でした。朗読するには、多くの準備が必要なのがわかりました。しかし、それはまた、学ぶ楽しさにつながっていくのかもしれない。

私は、アクセントやイントネーションの違いが悩みですが、注意して直していきたいと思います。そして、これまでの人生の経験が、作品と出会ったときに役立つことを願います。

回を重ねるごとに、楽しさが増していった朗読講座。「表現する喜び」を感じることができました。

東京・葛飾支部勉強会

東京都における農業教育の可能性

3月6日(日) 茗溪会館にて

はじめに

葛飾支部長・東京聖栄大学教授 渡邊 悟

江戸東京野菜の復活とその紹介

江戸東京・伝統野菜研究会代表 大竹 道茂

都立の農業系高校における食農教育の試み

都立農芸高校教諭 高橋 元幸

実践女子短期大学における食育活動の実践

実践女子短期大学教授 白尾 美佳

ディスカッション

コーディネーター・都立検ヶ丘高校長 徳田 安伸



ディスカッション(左から大竹氏、白尾氏、徳田氏、高橋氏)

「江戸東京野菜の復活とその紹介」として江戸東京・伝統野菜研究会代表の大竹道茂氏の講演がありました。

江戸に幕府が開かれてから爆発的に増加する江戸の人口を養うため、あるいは参勤交代する各地の大名が国元の野菜を食べるためなどの理由で、江戸に集められた全国の野菜の種が定着、品種改良され江戸ゆかりの野菜(のちの江戸東京野菜)として成立し発展してきました。非常に特徴的な性質を持った種もあり、遺伝資源としても貴重な江戸東京野菜でしたが、現代ではす

講演では江戸東京野菜の成立、文化的背景、そして復活に向けた現在の取り組みと今後の試みについて豊富な資料とともに説明されました。なお、大竹氏と江戸東京伝統野菜研究会の活動についてはホームページ (<http://edoyasai.shio.jp/>) を参照して下さい。

つづいて「都立農業系高校における食農教育の試み」として、都立農芸高校の高橋元幸教諭が、東京都の農業系学校の特色、専門技術による地域貢献の取り組みなどに関して発表しました。同校は食品科学科に在籍する生徒が全体の約半数を占め、食品加工等充実した生産設備を備えていること、さらにこれらを使った「奉仕」科目として近隣の身体障害者支援施設と連携した食農教育の実施報告などがありました。こうした「奉仕」と組み合わせた食農活動は、生徒自身による食の重要性の認識や「やりがい」の発見などの成果もあつたとのこと。一方、施設の維持や利用条件、ボランティアの導入方針など、今後解決しなければならない問題についても指摘されました。

3番目は、実践女子短期大学の白肩美佳教授から「実践女子短期大学における食育活動の実践」について発表されました。日野市における食育活動の具体的な事例、日野市と学校と農家とJAの連携関係が成立するまでの苦労、農業体験を通して学んだ農業技術の奥深さなど、地域に根差した活動を説明されました。

＊

終わりに、都立穂ヶ丘高校徳田安伸校長のコーディネートによりディスカッションがありました。

農業教育や食育などについて専門家らしい活発な意見交換がありました。また徳田氏より琳派の鈴木其一画「蔬菜群虫図」に、大竹氏の講演の中でも紹介のあった代表的な江戸東京野菜の「半白きゅうり」と「寺島なす」が描かれているという話題も提供されました。

報告 葛飾支部長 渡邊 悟 (62筑博農)

アナウンサーの仕事

(NHK甲府放送局)

12月4日(土) KKR甲府ニユ―芙蓉にて



え、次のようなお話をいただいた。

数学の教員になることを考えて筑波大学に入学したが、3年生の頃から人の話を聞いてもつと勉強したいと考え、ようになりマスコミへの就職を決意した。

〈美しい日本語〉

入局して1ヶ月ほどはアナウンサーの基礎を徹底的に学んだ。

まず、アクセントは変化する、ということ。

「無料」は「ムリヨウ」↓「ムリヨ」も現在では認められるようになった。「わかめ」は「ワカメ」・「ワカメ」のどちらも可。正しい読みをして視聴者からお叱りを受けることがある。

「花街」「逆手」はそれぞれ「カガイ」「ギャクテ」が正しい読みだが、「ハナマチ」「サカテ」が正しいのではないかと指摘を受ける。

読み方の変化として、日本語は発音しにくいと伸ばす傾向がある。「女王」はNHKとしては「ジョーオー」を正しい読みとしているが、「ジョーオー」と読んでいる人もいる。しかも「夫婦」は「フフ」↓「フーフ」や十二支の「子」「卯」などは「ネー」「ウー」となるのを見ると、長い間には「ジョーオー」になっていくのかもしれない。

また、読み方の変化として逆転もあげられる。「雰囲気」という言葉は「フンイキ」だが、高校生の半分くらいは「フインキ」と思っている。言葉は変化するものなので、私が生きているうちには逆転するかもしれない。逆転が定着した例としては「山茶花」が「サンザカ」↓「サザンカ」、「新しい」が「アラタシイ」↓「アタラシイ」などがある。

〈文字に書いてあることを読む〉

日本語は目で見ることより耳で聞くことの方が受け取る情報が多い。それは声の大きさ、高さなどで感情とといった情報を込めることができるからである。

アナウンサーは原稿に句読点を自分で振る。音に乗せて、読んで伝えるためである。「今日は雨だ」という文も「今日は、雨だ」と読むと意外な感じを、「今日は雨、だ」はがっかりした感じ、「今日は雨だ…」は失望といった感情を込められるようになる。

音声化によっていろいろな意味がつけられる。使い分けがコミュニケーションを豊かにする。この感覚は小さいうちに身につけることが重要である。

「銀貨」と読むとき「銀山」「銀座」のどちらに近いかを考えてみると「銀山」である。前者は銀という金属を、後者は輝くイメーヂを表している。同じ「銀（ギン）」でも我々は無意識に区別している。音により、そのものを表現している。

言葉にして発するからこそ、豊かな意味が表出されることを子供たちに教えてあげたい。

*

阿部さんの講演は、他にも朗読の魅力や話し言葉の話題など興味を引かれる内容がたくさんあり、その語り口調に魅了されているうちに、あつという間に終了の時間を迎えた。

質疑応答では、ニュースなどで地名の読み方（アクセント）がまちがっているという指摘に対し、日本全国に向けて放送するため全国標準アクセントで読んでいると回答があり、一同納得する場面もあった。

報告 山梨支部 古河 通也 (55筑二生)

長沼 武志 (07筑修教)

第26回 教職受験対策研修会から

教職を希望する筑波大学生に対して、本会と財団法人筑波資金財団が共催する「教職受験対策研修会」が3月9日(水)から11日(金)までの三日間「筑波研修センター」で開催された。参加者は46名であった。研修内容は次のようなものであった。

【第一日】

＊開講式には筑波大学キャリア支援室長五十嵐浩也先生、若溪会筑波大学支部長佐藤忍先生(60筑博生)筑波大学学生部就職課長高野澤勝美先生が出席され、田中正造事務局長(36健)も加わって、励ましのお言葉や、いかに全国の教育関係者が筑波大学の卒業生に期待しているか等のお話を伺った。

＊講義Ⅰ「教員採用試験の分析と対策」



今年から講師をお願いした本会理事の清水進一氏(43数)から豊富な資料に基づき公立学校の教員採用試験の倍率は下がったが、依然として厳しい地域・校種もあることや、私立学校の教員採用試験についてもお話いただいた。ついで、採用試験の受験対策として筆記試験、論文、面接等についてお話しされた。

＊採用試験合格者体験発表(昨年度の研修会に参加して今年度の教員採用試験に合格した先輩)

①茨城県 高校(数学) 久米景子さん(理工学群)



久米さん



佐藤さん



東さん



大山さん

【第二日】

＊講義Ⅱ「我が国の教育の今日的な課題」



長年講師をお願いしている飯田國雄氏(42修東史)はB4版24ページに及ぶ詳細な資料をご用意いただいた。

その内容は教育基本法と教育三法の改正・学習指導要領

の改訂、平成22年に発表された「生活指導提要」2009年版の文部科学白書に基づいた、暴力行為、いじめ、不登校、人権教育、キャリア教育、職業教育などに及んだ。

＊個人面接

学生宿舍所長の高野大二郎氏(40体)研修センター所長の飯村省一氏(46地理)と高原が面接官となり実施した。

＊集団面接の実演

4人の体験発表者に集団面接の実演を行ってもらった。

＊集団面接

受講生数人のグループに対して集団面接を実施し、4人の体験発表者からアドバイスをしてもらった。

＊集団討論の実演

4人の体験発表者に集団討論の実演を行ってもらった。

【第三日】

＊集団討論 用意されたテーマについて数人で70分間ほど討論した。ほとんどの参加者が始めての経験であったが議論が白熱し、参加者からは良い体験であったとの声が聞かれた。

＊論文指導 班ごとに分かれて初日に書いた論文を本人が音読し、意図するところや考えを述べ、聞いている参加者の意見を聞き、指導者からのコメントを聞くと

いう形式で実施した。参加者からは「大変役にたった」との声が多かった。

閉講式を行うため集合する途中で、東北関東大地震に遭遇し、屋外に避難したが、未曾有の揺れに生きた心地がしなかった。屋外で簡単に閉校式を行い、急ぎ解散した。

若溪会事務局 高原 将(36東史)

平成22年度

筑波大学芸術賞、茗溪会賞決定!

筑波大学芸術専門学群、人間総合科学研究科前期課程芸術専攻は、毎年度の学群卒業研究及び前期課程芸術専攻修了研究の中の優秀作品に対して、顕彰と作品収蔵を目的とし、筑波大学芸術賞・茗溪会賞を授与している。

筑波大学芸術賞は平成9年度から、茗溪会賞は平成18年度から始められ、これまでの受賞者は、卒業・修了後にそれぞれの芸術分野で活躍し、すでに頭角を現し始めている。また、この顕彰により収蔵された作品は、芸術的評価もさることながら、芸術組織の今後の貴重な史料として大切に保管されている。

今回は残念ながら東北関東大地震の影響で受賞作品展開催が中止となってしまったが、折を見て展示公開する機会を作りたいと考えている。

今年度の受賞作品等及び受賞者は次のとおりである。

◎筑波大学芸術賞

(芸術専門学群)

・《Voyage》 洋画(油彩) 安中 仁美

・《天使と仕事》《リサとおしごと》《ユーレイの歌》 ビジュアルデザイン 古山 菜摘

(人間総合科学研究科前期課程芸術専攻)

・《make-up》 総合造形(映像) 浅井 佑子

◎茗溪会賞

(芸術専門学群)

・《霖雨》 日本画 福田 健二

・《脳マップてぬぐい》 情報デザイン 奈須愛也香

(人間総合科学研究科前期課程芸術専攻)

・《remember》《song II》 洋画(版画) 肖 瑛

茗溪学園だより

山海嘉之先生（筑波大学教授）講演会

平成23年1月14日、山海嘉之先生がロボットHAL（ハル）を伴い茗溪学園にやってきました。体育館に勢ぞろいした中学一年から高校二年までの生徒千二百人に、『夢』『情熱』『人を思いやる心』が未来開拓を加速するという題で講演をしてくださいました。

この講演会は、本校の父母会（父母会長・坪井康次筑波大学教授）が催してくださったもので（山海先生も会員です）、夢に向かって前進する生徒達の歩みが、より大きなものになって欲しいという保護者の願いが込められたイベントでした。

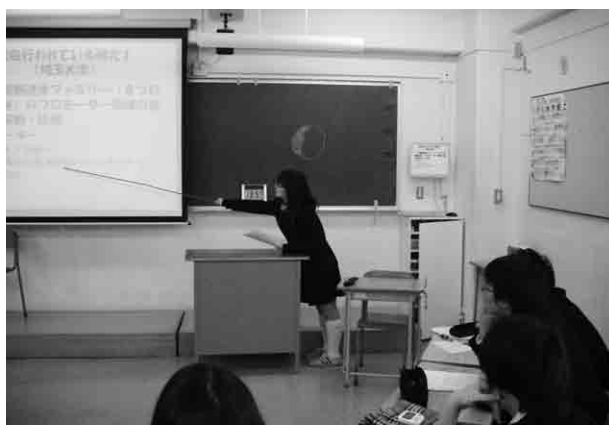


題名の通り、夢や情熱をもち、人を思いやる心が、より豊かな社会を築いたり、人のために役立つ科学技術の開発や発展をもたらすものだと、いうことを、これからの社会で未来開拓を推し進める担い手となる生徒達に語りかけてくださいました。

個課研・筑波大学発表会

筑波大学の後援をいただき、大学会館の講堂など七会場で「個人課題研究筑波大学発表会」が、2月8日に開催されました。

第三回となる今年度は、本校内で全員発表会（12月10日実施）を行ない、優秀発表者35名を選抜して改めての大学発表会でした。校内発表会では、高校二年生全員が14、15名ずつ18会場に分かれて発表をしました。課題の指導をした担当教員による研究内容の評価と、発表当日のプレゼンテーションの評価から、大学での発表者が選ばれました。大学発表会では高校一年が聴衆となり、一年後に発表する姿を思い描きながら先輩の発表に耳を傾けました。



七会場それぞれの発表者は、会場ごとに座長としてご出席くださった大学の先生方から、より研究を深めるための貴重な講評をいただけるのが褒美ですが、大変よい発表でしたなどさらなるお褒めの言葉をいただいで喜びが何倍にも膨らんだと嬉しそうに報告している生徒もいました。

締めくくりは、全員が講堂に集まって筑波大学副学長清水一彦先生から、まとめのご講評をいただきました。研究および発表するときの十の心得という内容で、特に発表をしたばかりの生徒達には強く記憶に残るお話になっていました。

寒稽古・突寒ラグビー

本校では、厳寒期の二月上旬、「寒稽古（剣道）」と「突寒ラグビー」を行います。参加者は、高校二年生全員と寮生です。高校二年の通学生徒全員が入寮して行われます。開校以来の行事で今年は32回目となりました。女子は剣道に男子はラグビーに参加します。

朝五時半には体育館、グラウンドにそれぞれ集合し、元気に挨拶を交わし稽古、練習が始まります。日の出前の一番冷え込む時間帯、体育館の床は氷のように冷たく、グラウンドでは暗闇に目を凝らしてボールを見つけパスを繋ぎます。

剣道は、筑波大学の剣道部員全員が参加して、本校生徒の指導に当たります。五日間行われる寒稽古中の掛かり稽古の累計ポイントの高得点者には、「剣姿賞」という賞が贈られますが、最終日の表彰の時の女子生徒達の表情はやり切ったという喜び溢れています。

ラグビーは、6チームに分かれて練習してきた成果を競う対校試合を行います。ラグビー部員が各チームのリーダーとなって練習を進めてきたので、それぞれの指導力が問われる試合で、白熱したプレーが展開されます。優勝チームには、お菓子の一杯詰まった優勝カップが贈られました。

